

乳幼児の電子メディア使用に対する 養育者の認識に関する文献レビュー

宮崎県立看護大学

甲斐 鈴恵

抄 録

本研究の目的は、養育者が乳幼児に電子メディアを使用させる際にどのような認識を抱いているかについての研究の動向を明らかにすることである。2000年から2021年4月までに発行された国内文献から、16件について分析を行った。

対象文献は主に量的研究が15件、質的研究が1件であった。これらの対象文献の結果に記載された内容を質的に分析し、養育者の認識の記述から72コードを抽出し、《1. 親として気になることや優先させたいものがある》《2. 子どもの成長や思いを満たす》《3. 使用による心身への悪影響を心配》《4. 親子と一緒に楽しむ》《5. 習慣的な使用》の5カテゴリーに整理した。とくに、親の立場からのコードが多く、養育者が家事や育児を両立させる手段として電子メディアを用いようと思ひ、育児負担軽減のために使用していることが明らかになった。また、電子メディアの使用時間と、母親意識や母親の育児態度との関連を分析した調査結果では、互いに相関関係が認められていた。このことから、養育者の親役割意識および育児態度を加えることの有効性が示唆された。

対象文献は、主に無記名式自記式質問紙調査研究のため、養育者の認識についての具体的な記述に限界がある。今回得られた5つのカテゴリーに、養育者の親役割意識および育児態度を加え質的な調査を行い、養育者の認識の詳細を明らかにする必要がある。

Keywords : 養育者、電子メディア、認識、乳幼児

はじめに

我が国においては、2000年以降、テレビやビデオ（DVD含む）、スマートフォン（以下、スマホ）などの電子メディア機器が普及し、日常生活には便利で有益なものとして欠かせないものとなった。とくに、養育者にとっては、スマホをはじめとする電子メディア機器は、情報収集、仲間づくり、授乳管理ツール、予防接種管理ツールなどに用いられ、便利で有益な目的で使用されている。また、子どもにとっ

ても、電子メディアから流れてくる情報を楽しみ、知識量が増えるなどの知育教材の期待がある¹⁾。

しかし一方で、心身の成長発達が著しく、身体機能が未熟な乳幼児期は、電子メディアを長時間使用することによる心身の不調などの影響を強く受けやすいことから、清川²⁾は、視力低下や体幹を含む筋肉の低下および身体能力のレベル低下、親子の愛着形成の歪みの危険性を指摘している。内閣府や経済産業省は、健康問題について重要視し、電子メディ

ア接触時間を制限することや規則正しい生活習慣の推奨について、様々な啓発リーフレットを作成し啓発活動を行っている。さらに、2019年にはWHOが「5歳未満の子供の身体活動、座りっぱなしの行動、睡眠に関するガイドライン」³⁾にて、さまざまな身体活動を推奨するとともに、2歳児について、スクリーンタイムは1時間を超えるべきではないなどの提言を行っている。

養育者はこのような電子メディアに関する啓発活動の情報をうける一方で、急激に普及している電子メディアの使用について、どのように受け止め対応してよいかに悩み、乳幼児への電子メディアの使用について複雑な認識を抱えていた⁴⁾。そこで、養育者がどのような思いで乳幼児に電子メディア（主にテレビやスマホ）を用い、どのような悩みを抱えているのかなどの養育者の電子メディアの使用にまつわる認識を理解し、養育者を支援することの必要を感じた。

そこで、本研究では、まず、養育者がどのような認識を抱いて乳幼児に電子メディア（主にテレビやスマホ）を使用するかを扱った文献を検討し、養育者の電子メディア使用の認識はどのようなものかを明らかにする。これにより、電子メディアを使用する養育者の認識について理解が深まり、養育者支援につながっていくと考えた。

目的

養育者が乳幼児に電子メディアを使用させる際に、どのような認識を抱いているかについての研究の動向を明らかにする。

研究方法

1. 文献の選定

2000年から2021年4月時点において発行された国内文献について、文献検索データベース医学中央雑誌（Web版）を用いて検索した。主題検索式を「乳幼児or未就学児or子ども」and「養育者or保護者or親」

and「電子メディアorテレビ」and「認識or意識or思い」、絞込検索を「原著論文」「解説・総説」として、43件を抽出した。同様の手順で、メディカルオンラインを検索し160件、CiNiiを検索し15件を抽出した。これらの文献において、タイトルおよびアブストラクトから、乳幼児の電子メディア使用に対する養育者の認識について、十分な記載がないものは除外し、重複する文献を整理し、10件を抽出した。

さらに、重要文献の見落としを補うために、抽出した文献の引用文献から、上記以外の6件の文献を抽出し、最終的に16件を対象文献とした。

2. 分析方法

対象文献を、タイトル、発表年、研究目的、研究方法、調査対象者、調査フィールドにより整理した。続いて、養育者の育児状況や電子メディアを使用する理由などを、各文献がどのように把握しているかについて質問紙の調査項目から分析した。

さらに、養育者が乳幼児に電子メディアを使用することについて、対象文献の結果に認識として記述されている記述内容を取り出し、コードを作成した。各コードの類似性、関連のあるものを検討し、サブカテゴリー化、さらにカテゴリー化を行った。これらの分析は、公衆衛生看護学を専門とする大学教員および大学院博士後期課程学生とで実施した。

結果

1. 対象文献の概要

タイトル、発表年、著者、研究方法、調査対象者・対象者数について、概要を示した（表1）。

発表年では、2000年から2021年4月までを5年ごとに分けてみると、論文数は3～6件で推移しており、急な増減は見られなかった。

研究方法は、主なものは、無記名自記式質問紙調査が15件、半構造化面接法が1件であった。

質問紙調査による対象者は、母親と記載されているもの11件、その他養育者5件で、専業主婦、または、就業している養育者などであった。

質問紙調査による対象者数は、113名から2,250名と幅があった。

調査対象フィールドは、子ども園・保育所など、小児科外来など、多様な場所で行われていた。(表2)。

2. 調査項目による分類

調査項目による分類は、表3に示した通りである。年齢、子どもの月齢、親の職業、保育所などへの通所状況(基本情報①)、同居人数や支援者の有無(基本情報②)、および、電子メディア使用状況・場面

表1 対象文献の概要

文献	タイトル	著書	研究方法	調査対象	対象数
A	1~2歳児をもつ母親の育児におけるデジタルデバイス使用に対する認識(2020)	松野 友絵, 杉浦 絹子	無記名自記式質問紙調査	診療所・病院・保健センターに来院した1~2歳児1人のみを育児中の母親	134名
B	育児へのスマートフォン利用に対する母親の認識と母性意識の影響(2020)	石黒 紗里奈, 熊谷 真倫子, 篠原 ひとみ	無記名自記式質問紙調査	保育所に通う2~3歳児を持つ母親	186人
C	子どもの電子メディア接触に関する保護者の意識 認定こども園などに通う子どもの保護者を対象に(2019)	甲斐 鈴恵	無記名自記式質問紙調査	認定こども園に通っている子どもの保護者	20園1,675帯(回収率77.7%)から回答を得、有効回答であった1,652世帯(有効回答率76.6%)、2,250名を分析対象
D	北海道における未就学児の電子メディア接触の現状(2018)	諏訪 清隆	無記名自記式質問紙調査	保育所、幼稚園、幼児センターに通う0~6歳の未就学児の保護者	1,815人の保護者の内、1,187人(65.4%)から回答
E	乳幼児のメディア接触と母親の意識・行動との関連(2018)	遠藤 有里, 杉原 佑美, 祖田 亜希子 他	無記名自記式質問紙調査	幼稚園・保育所に通う子どもを持つ母親	367名 回収は209名(56.9%)で、そのうち有効回答189名(49.8%)を分析対象
F	3歳児の養育における統制場面でのスマートフォン使用に関する母親の認識(2017)	大西 竜太, 平野 美千代, 佐伯 和子	質的記述的研究	幼稚園・保育所・子育てサロンを利用する3~4歳児を養育し、スマホを持つ20~30代の母親	10名 3~4歳児は母親にとっての第1子であり、療育機関の利用がなく、現在治療中の疾患がない市内の幼稚園、保育園および地域の子育てサロン参加者
G	幼児のデジタル機器利用実態と保護者の意識(2014)	大宮 明子, 石田 有理	研究1: 無記名自記式質問紙調査 研究2: 観察調査	研究1: 都内の私立保育所に通う園児の保護者 研究2: 3歳児とその母親または父親	研究1: 114名 研究2: 3名
H	乳幼児の長時間視聴に関連した要因の探索 育児環境と母親の意識に焦点をあてて(2013)	若松 美貴代, 武井 修治	無記名自記式質問紙調査	保健センターに健康診査目的で来院した1歳6か月児を持つ母親	311名より調査票を回収した中で、児にテレビを視聴させていないと回答した7名を除いた304名からの回答を解析対象
I	就学前児のテレビ視聴と母親の育児態度(2012)	巨 直子	無記名自記式質問紙調査	幼稚園・保育所・幼稚園に通う就学前児を持つ母親	144名(内139名)
J	乳幼児をもつ家庭におけるテレビ視聴に関する研究(2011)	武市 久美	無記名自記式質問紙調査	保育所と幼稚園に子どもが通う母親	1174人(保育園664人、幼稚園510人。有効回答率50.0%)を分析対象
K	子育て中の母親の育児番組視聴に関する研究(2010)	武市 久美	無記名自記式質問紙調査	保育所と幼稚園に子どもが通う母親	2347人(保育園1438人、幼稚園909人)の内、1274人(回収率54.3%)から回答。記入漏れなどが多く見られる回答などを除き、1175人(保育園664人、幼稚園511人。有効回答率50%)を分析対象
L	未就園児のテレビ・ビデオ視聴時間と母親の心理社会的要因との関連(2010)	服部 伸一	無記名自記式質問紙調査	2歳児歯科検診を受診した幼児を持つ母親	2258名を対象とした。そのうち、1111名の回答を得た(回収率49.2%)。本研究では、この中から未就園児527名を抽出して分析対象
M	幼児期のテレビ・ビデオ視聴と養育環境の関連(2009)	加納 亜紀, 高橋 香代, 片岡 直樹 他	無記名自記式質問紙調査	2001年8月から9月に出生した幼児の全養育者(健康診断)	1.6健診では、1,440児のうち回収できた1,057児(回収率73.4%)のうち、有効回答の得られた695児(有効回答率65.8%)を分析対象。3.6健診で、2,035児のうち回収ができた1,607児(回収率78.9%)のうち有効回答の得られた995児(有効回答率61.9%)を分析対象
N	育児期の母親が「子育てにテレビが必要」と感じるとき(2007)	神谷 哲司, 小笠原 拓, 柿内 真紀 他	無記名自記式質問紙調査および問診データ	1歳6ヶ月健診, 3歳児健診対象者数	最終回収数は3歳児311通(回収率81.6%)、1歳6ヶ月児300通(回収率82.2%)
O	「子どもとメディア」に関する意識調査0歳から2歳児のメディア環境の現状について テレビやビデオ視聴2時間の影響(2005)	伊藤 幸生, 秋山 千枝子, 石黒 成人 他	無記名自記式質問紙調査	日本全国の日本小児科医会会員の病院を受診した保護者	0~6か月未満では、888名の回答。6か月~1歳未満では、931名の回答。1歳~3歳未満では、996名の回答
P	乳幼児のテレビ・ビデオ視聴に関する実態と母親への意識調査(2004)	小島 正子, 松井 秋子, 佐々木 純子 他	無記名自記式質問紙調査	外来受診した就学前の乳幼児のいる保護者(母親に限定)および1か月健診と1歳児問診	アンケートの配布総数は334枚、回答率は100%、有効回答数は323件(乳幼児数457名)、有効回答率は96.7%

表2 質問紙調査による調査対象フィールド

調査対象フィールド	件数
子ども園・保育所など	8
小児科などの外来	3*
乳幼児健康診断	5*
子育て支援センター	1

*2件が重複

表3 調査項目による分類

調査項目	N=16 重複回答 件数
基本情報①（年齢、子どもの月齢、親の職業、保育所などへの通所状況など）	16
基本情報②（同居人数、支援者の有無）	9
使用状況・場面	16
養育者の電子メディアに関する知識	5
母親の育児態度（管理・受容的養育態度）	3
母親意識尺度（母親役割の受容について：積極的・肯定的、消極的・否定的）	2
子育ての楽しさ	1

などについて調査されていた。

同居人数や支援者の有無について調査されていた文献は、9件であった。

すべての文献で、電子メディアの使用時間に着目した調査が行われていた。さらに、電子メディアの使用時間と、母親の育児態度との関連に着目した文献が3件、母親意識との関連に着目した文献が2件、子育ての楽しさとの関連に着目した文献が1件あった。母親の育児態度は、子どもの健康や安全への配慮、しつけに対する毅然とした態度を表す管理的なもの8項目、子どもの気持ちを受容し、愛情欲求に応じてやることや積極的な関与を表す受容的なもの13項目で構成されていた。母親意識は、肯定的意識を問う6項目、否定的意識を問う6項目で構成されていた。これらの各項目について得点化し、電子メディア視聴時間との関連が分析されていた。積極的に肯定的な意識項目の得点が高い母親は、子どもにスマホを見せる時間が短いことが報告されていた。また、電子メディア使用時間と管理態度得点と受容態度得点は弱いながら有意な相関が認められていた。このことは、けじめのある態度で接することができない場合、また、子どもの気持ちを受け入れながら積極的に育児に関わることができない場合に、子どものテレビ・ビデオの視聴時間が長くなることを示していた。

3. 乳幼児に電子メディアを使用する際の養育者の認識

乳幼児に電子メディアを使用する際の養育者の認識について記述されたコード、サブカテゴリー、カ

テゴリーを表4に示した。

以下、抽出したコードを『 』、類似性、関連のあるものを分類しサブカテゴリーを〈 〉、さらにカテゴリーを《 》で示した。

抽出されたコードは、全部で72コードであった。類似性、関連のあるものを分類したカテゴリーは《1. 親として気になることや優先させたいものがある》《2. 子どもの成長や子どもの思いを満たす》《3. 使用による心身の悪影響を心配》《4. 親子が一緒に楽しむ》《5. 習慣的な使用》の5つに整理された。その中でも、《1. 親として気になることや優先させたいものがある》のカテゴリーは〈親のペースで家事や育児をマネジメントする時に有効〉などの5つのサブカテゴリーから構成され、コードの最も多かったカテゴリーであった。

1) 親として気になることや優先させたいものがある

このカテゴリーは〈親のペースで家事や育児をマネジメントするときに有効〉〈周囲の視線が気になり、静かにさせたいときに有効〉〈しつけやルールを教えるときに便利なツールであり、親役割の負担の軽減〉〈子どもの機嫌が悪く要求が強いときに、とにかくその場をしのぎたい思い〉〈親が子どもから離れ、自分の時間の確保〉の5つのサブカテゴリーから構成された。

サブカテゴリー〈親のペースで家事や育児をマネジメントする時に有効〉は、『親が家事をするとき、家族の生活を優先させるときに時間が確保できる』、『子どもを一人にする時に、子どもの安全確保のた

甲斐 鈴恵

表4 電子メディアを使用する際の養育者の認識

n=16(重複)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	文献数	文献
1 親として 気になる ことや 優先させ たいもの がある	親のペースで家事や育児を マネジメントするときに 有効	親が家事をするとき、家族の生活を優先させるときに時間が確保できる	7	A,D,E,F,H,K,N
		子どもを一人にするときに、子どもの安全確保のため	2	L,M
		子どものおむつ替え・着替え・歯磨きのとき	1	A
		子どもに行う医療処置(吸入・吸引)のために子どもに動かないでほしいとき	1	A
		親が(家事や仕事で)忙しい時や子どもが遊びたがった時	1	G
	周囲の視線が気になり、静 かにさせたいときに有効	移動時間や待ち時間などに子どもに動いてほしくないとき	5	A,B,D,E,G
		静かにしてほしい時、じっとさせるとき (周囲の視線が気になるとき、親自身が静かさを求めるとき)	3	D,F,L
	しつけやルールを教えるとき に便利なツールであり、 親役割の負担の軽減	子どもが反抗や主張をする時に、親が感情的にならずに、言い聞かせることができる	1	F
		生活習慣(排泄、清潔 他)を獲得するときのモデルとして活用できる	1	C
		子どもがルールを学ぶ手段の1つとしての活用	1	C
		生活習慣(目覚め、就寝 他)のリズムづくりの1つの手段としての活用	1	N
	子どもの機嫌が悪く要求が 強いときに、とにかくその 場をしのぎたい	機嫌が悪い時やぐずるときに子どもをあやすため	3	A,B,E
子どもがテレビやスマホを要求するとき		2	A,B	
親が子どもから離れ、 自分の時間の確保	子どもがテレビに集中していると、親が趣味の時間の確保ができる	1	A	
2 思いど も満 たす 成長 や	知識や言葉が増えるなど子 どもの成長発達に促される 側面を期待	言葉や文字や知識や教養が身につく、視野が広がることを期待	9	A,B,C,E,G,J,L,M,P
		好奇心が旺盛になる、潜在力が引き出される等の内面的な発育が促されることを期待	3	A,C,J
		教育番組を見せる	2	A,P
		子どもの利益になる、子どもの思考の広がりにつながると感じている	1	F
		集中して一人遊びができるようになることを期待	1	G
	子どもの気持ちを満たし 快の感情をひき出す	子どもが喜ぶ	4	H,L,M,P
		見せると子どもが明るい気持ちになる	1	J
頑張る我慢する子どもの気持ちを満たしてあげたい	1	F		
3 悪影心 響身用 をへに 心のよ 配る	長時間使用による子どもの 心身への悪影響を心配	テレビやスマホを長時間見せることで、視力・聴力・言葉の遅れなどの心配や 気がかり	4	A,B,C,E
		夢中になりすぎたり、依存性が高まることへの心配	3	C,E,G
4 親 楽子 しが む一 緒に	親子が一緒に楽しめ、 心が満たされるものとして 活用	親子で一緒に楽しめる	4	A,B,K,L
		自分や家族がテレビが好き	2	J,M
		親子で共通の話題が見つかる	1	C
5 習 慣 的 な 使 用	習慣的に使用しており、 テレビやスマホがある生活 が通常の日常生活スタイル	退屈せずに時間を過ごせる	2	C,G
		きょうだいが見ているので一緒に見ている	2	E,N
		なんとなく・手軽・習慣	1	K
		どのように親が子どもに関わればよいかかわらず、身近にある機材に頼る	1	G

め』、『子どものおむつ替え・着替え・歯磨きのとき』などのコードから、構成されていた。このことから、養育者は、日常的に、食事づくりや掃除、洗濯などの家事や育児を行わなければならないと感じていること、また、子どもの直接的な世話をを行う際にも、身近にサポートを得られる存在がなく、養育者が子どもの安全を考慮しつつ、家事などを優先させたいことが伺えた。このことから、身近にサポーターがいない時に家事と育児の両立させるための有効な手段と認識していたと整理した。

ほかに、『移動時間や待ち時間などに子どもに動いてほしくないとき』、『静かにしてほしいとき、じっとさせるとき（周囲の視線が気になるとき、親自身が静かさを求めるとき）』など、親自身が社会的な立場から周囲の視線が気になり、子どもに静かにすることを求める思いのコードからサブカテゴリー〈周囲の視線が気になり、静かにさせたいときに有効〉と整理した。

さらに、『子どもが反抗や主張をするときに、親が感情的にならずに言い聞かせることができる』、『生活習慣（排泄、清潔 他）を獲得するときのモデルとして活用できる』などのコードから〈しつけやルールを教える時に便利なツールであり、親役割の負担の軽減〉のサブカテゴリーと整理した。

この他、『機嫌が悪くときなどに子どもをあやすため』や『子どもがテレビ等を要求する』コードから、〈子どもの機嫌が悪く要求が強いつきに、とにかくその場をしのぎたい〉といったその場しのぎの手段のサブカテゴリーがあった。最後の〈親が子どもから離れ、自分の時間の確保〉は、『親の趣味の時間の確保ができる』といった親の立場から生じている「子育て」から解放された「人」としての満足を得る手段のサブカテゴリーと整理した。

2) 子どもの成長や子どもの思いを満たす

このカテゴリーは〈知識や言葉が増えるなど子どもの成長発達が促される側面を期待〉〈子どもの気持ちを満たし快の感情をひき出す〉の2つのサブカ

テゴリーから構成された。

サブカテゴリー〈知識や言葉が増えるなど子どもの成長発達が促される側面を期待〉は、『言葉や文字や知識や教養が身につく、視野が広がることを期待』、『好奇心が旺盛になる、潜在力が引き出される等の内面的な発達が促されることを期待』、『教育番組を見せる』などのコードから電子メディアを使用することで教養が増えること、子どもの成長発達を期待していることが伺えると整理した。

サブカテゴリー〈子どもの気持ちを満たし快の感情をひき出す〉は、『子どもが喜ぶ』、『見せると子どもが明るい気持ちになる』、『頑張ってる子どもの気持ちを満たしてあげたい』のコードから、構成した。これらは、子どもの思いや気持ちを大切に、子どもの快の感情をひき出し、子どもの努力に対して報酬として喜ぶものを親として与える様子が伺え、これらには子どもを中心とした認識が感じ取れ、『子どもの成長や思いを満たす』と整理した。

3) 使用による心身の悪影響を心配

このカテゴリーは、サブカテゴリー〈長時間使用による子どもの心身への悪影響を心配〉から構成した。『テレビやスマホを長時間見せることで、視力・聴力・言葉の遅れなどの心配や気がかり』、『夢中になりすぎたり、依存性が高まることへの心配』のコードから、構成した。これらは、子どもの成長発達を視野に置きつつ、電子メディアの長時間使用や、集中した使用による子どもの心と体の悪影響を気に留め心配事として認識している親の思いが記述されたものと整理した。

4) 親子が一緒に楽しむ

このカテゴリーは、サブカテゴリー〈親子が一緒に楽しむ、心が満たされるものとして活用〉から構成した。『親子で一緒に楽しめる』、『自分や家族がテレビが好き』、『親子で共通の話題が見つかる』のコードから、親と子のどちらかの立場ということではなく、親と子が共に楽しみたいとの思いであり、電子メディア自体に何かの手段を求めているのでは

なく、見ることそのものを目的とする認識であった。

5) 習慣的な使用

このカテゴリーは、サブカテゴリー＜習慣的に使用しており、テレビやスマホがある生活が通常の日常生活スタイル＞から構成した。『退屈せずに時間を過ごせる』『きょうだいが見ているので一緒に見ている』『なんとなく・手軽・習慣』などのコードから、養育者の生活にテレビやスマホがある生活が定着しているため、改めて、テレビやスマホがある生活、もしくは、ない生活を考えることそのものがなく、身近な存在として感じているため、『習慣的な使用』として整理した。

考察

1. 養育者の電子メディア使用の認識

国内における乳幼児の電子メディア（テレビやスマホ）使用に対する養育者の認識について分析した結果、5つのカテゴリーが明らかになった。

1) 親として気になることや優先させたいものがある（家事・育児との関連）

養育者は、＜親のペースで家事や育児をマネジメントするときに有効＞と認識していた。つまり、家事や育児を両立させる時、テレビやスマホを見せることが有効であると認識していた。家事は、「食事の準備・片づけ」「洗濯」「掃除」「日常の買い物」「ゴミ出し」などの項目があり、「食事の準備・片づけ」「洗濯」については、「毎日・毎回する」と6～7割の母親が回答した調査報告がある⁵⁾。このことから、家事は、毎日行われる必要があるため、養育者は短時間で効率よく家事が行えるよう工夫や配慮を行わなければならない。さらに久保⁶⁾は、延期のできない裁量の余地のない義務的な日々のルーティンな家事があると述べており、永井⁷⁾は、家事を繰延不能家事と繰延可能家事に分類し、繰延不能家事として、「食事の支度」「配膳」等を選定していた。動き回る幼い子どもがいても、繰延できない家事を、とくに、身近にサポーターがいない時に、養育者が

どのように工夫を行っているか、代替え可能なものがあるのか、詳細な調査にて検討の必要性があると考えた。

他に、＜子どもの機嫌が悪く要求が強いときに、とにかくその場をしのぎたい＞という認識が読み取れた。久保⁶⁾は、育児を「見守りやコミュニケーションを伴う活動であり、時間そのものを必要とする時間消費的活動である（略）。しかも、情緒的機能、教育的機能など外部にすべてをゆだねることにはなじまない機能を持っている」と述べている。育児は代替えがきかず養育者の日常生活の大半の時間を占めている。岩淵⁸⁾は、養育者の育児負担感について、複数の寄与因子を報告しており、その1つの「子どもの特性」として、「よく泣いてなだめにくい」や「かんしゃくを起こす」、「機嫌がかわりやすい」などに着目していた。これらの因子は、養育者のストレスの一因となることは推察できる。本研究の対象文献の1つである大西⁹⁾は、3歳児が反抗・自己主張する場面における母親のスマホ使用の認識について、母親が子どもを自分の期待・意図・計画に従わせようと関わるときに有効な魅力的な補助手段として活用していることを報告していた。養育者の貴重な認識が明らかにされていたが、3歳児という限定した年齢、反抗・自己主張する場面に限局されているため、日常生活全般における、子どもの機嫌の悪さの程度、子どもの要求の程度、その要求における養育者の認識について検討の必要性があると考えた。

2) 電子メディア使用による心身の悪影響を心配

＜長時間使用による子どもの心身への悪影響を心配＞している養育者の認識が明らかになった。清川²⁾は、視力低下や体幹を含む筋肉の低下等の危険性を指摘している。本研究においても、養育者が、子どもの視力障害・聴力障害・言葉の遅れなどを心配し気にかけていることが読み取れた。その心配や気がかりは、どの程度であるのか、それはどのような知識に基づいたものであるのか、その知識は正しいのかについての詳細は明らかではない。

本研究で取り扱った文献は、主に無記名式自記式質問紙調査であることから、選択式の回答が多くを占め、選択式では計り知れない養育者の認識が十分に記述されているとはいいがたい。また、記述式の質問紙では、今抱えている養育者の認識を十分に記述できる時間が子育てをしながら確保されていたのか、また、適切な言葉で記述できているのかについては、不明である。今後、インタビュー調査において詳細を明らかにする必要がある。

2. 電子メディアを使用する際の認識と母親意識と育児態度

16の文献中2件が母親意識尺度に着目し、また、3件が母親の育児態度の項目を設定し、電子メディア使用時間との関連性を分析していた(表3)。

「母親意識尺度」とは、1988年に大日向雅美が作成した尺度¹⁰⁾であり、母親であることの受容と子どもに対する関わり方の認識をとりあげたものである。確かに、我が国では、「母性神話」に伴う、子育てにおける母親絶対の論理が広く根深く浸透し、母子関係を重視し強調する社会背景がある。このことから、母親意識は、子どもとの関係において切り離せないことが伺える。しかし一方で、近年では、男女共同参画として、母親のみが育児や家事を担うのではなく、両親がともに協力し合う育児生活が推奨されていることもあり、母親意識に限局せず、母親と父親の養育者の親役割意識に着目することが必要と考える。

今後本研究で得られた養育者の認識の5つのカテゴリーに、養育者の親役割意識や育児態度を加えたインタビューガイドを作成し、養育者の電子メディア使用に対する認識について質的な調査を行うことの必要性があると考えられる。

結語

1. 16件の対象文献において、主なものは、量的研究が15件、質的研究が1件であった。
2. 養育者の認識の記述72コードを抽出し、《1.

親として気になることや優先させたいものがある》《2. 子どもの成長や思いを満たす》《3. 使用による心身の悪影響を心配》《4. 親子と一緒に楽しむ》《5. 習慣的な使用》の5カテゴリーに整理した。とくに、親の立場からのコードが多く、養育者が家事や育児を両立させる手段として電子メディアを用いようと思ひ、育児負担軽減のために使用していることが明らかになった。

3. 電子メディアの使用時間と、母親意識・育児態度との関連についての分析では、相関関係が認められていた。電子メディアを使用する際の養育者の認識に、養育者の親役割意識および育児態度を加えることの有効性が示唆された。
4. 対象文献は、主に無記名式自記式質問紙調査研究のため、養育者の認識については具体的な記述に限界がある。今回得られた養育者の認識の5つのカテゴリーに、養育者の親役割意識および育児態度を加え質的な調査を行い、養育者の認識の詳細を明らかにする必要がある。

研究の限界と今後の課題

今回の文献検討は、電子メディアを使用する際の養育者の認識に焦点を絞り、かつ、論文の体裁が整った原著と解説・総説に限定した。さらに、図書や報告書などからも養育者の認識の現状を十分に把握する必要がある。

本研究で得られた知見を一助とし、養育者の電子メディア使用の認識についての、さらなる質的な調査研究を蓄積し、図書などの文献収集を重ね、養育者の認識の詳細を明らかにしたい。

謝辞

本研究において分析について有益なご助言をいただいた平野かよ子教授、博士後期課程研究室の皆様、心より感謝申し上げます。

文献等

- 1) 橋元良明, 久保隅綾, 大野志郎. 育児とスマートフォン. 東京大学大学院情報学環情報学研究調査研究編 2020 ; 36 : 197-241
- 2) 清川輝基. 進行する子どもの「劣化」 スマホ社会の落とし穴. 日本小児科医会会報 2017 ; 53 : 10-14
- 3) 世界保健機関. Guidelines on physical activity, sedentary behaviour and sleep for children under 5 years of age. License : CC BY-NC-SA 3.0 IGO <http://www.who.int/iris/handle/10665/311664> (参照2021年6月14日)
- 4) 甲斐鈴恵. 子どもの電子メディア接触に関する保護者の意識 認定こども園などに通う子どもの保護者を対象に. 日本小児看護学会誌 2019 ; 28 : 325-332
- 5) 男女共同参画局. 令和元年度家事等の仕事のバランスに関する調査報告書 概要版. https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/balance_research_202003.html (参照2021年8月15日)
- 6) 久保桂子. 共働き夫婦の家事・育児分担の実態. 日本労働研究雑誌 2017 ; 689 : 17-27
- 7) 永井暁子. 共働き夫婦の家事遂行. 家族社会学研究 1992 ; 4 : 67-77
- 8) 岩渕祥子, 奥澤聡子, 神川洋平 他. 母親の育児負担感への寄与因子の検討に関する研究. 信州医誌 2009 ; 57 (5) : 155-161
- 9) 大西竜太, 平野美千代, 佐伯和子. 3歳児の養育における統制場面でのスマートフォン使用に関する母親の認識. 日本公衆衛生看護学会誌 2017 ; 6 (3) : 240-248
- 10) 大日向雅美. [新装版] 母性の研究 その形成と変容の過程 : 伝統的母性観への反証. 日本評論社, 2016 ; 135-169

A Literature Review on Parents' Perceptions of Preschoolers' Electronic Media Use

Miyazaki Prefectural Nursing University

Suzue Kai

Abstract

The purpose of this study was to identify trends in research on parents' perceptions of the electronic media use of preschoolers. Sixteen studies from the domestic literature published in Japan between 2000 and April 2021 were analyzed.

The target studies consisted of 15 quantitative studies and one qualitative study. The results of these studies were qualitatively analyzed, and 72 codes were extracted from the descriptions of parents' perceptions, which were organized into the following five categories: 1. those things that parents care about and want to prioritize, 2. fulfilling children's development and desires, 3. parental concern about the negative mental and physical effects of use, 4. parent and child shared enjoyment, and 5. habitual use. Notably, many codes from the standpoint of parents were extracted, and it became clear that parents used electronic media as a means of balancing housework and childcare. Parents used it to reduce the burden of childcare. Additionally, the results of one survey showed a correlation in the relationship between the amount of time spent using electronic media and maternal awareness and attitudes toward child-rearing. This suggests the effectiveness of adding the awareness and parenting attitudes of parents.

The target studies mainly involved anonymous self-administered questionnaire surveys, which necessarily limits the specific description of parents' perceptions. Results suggest the necessity of qualitative research to clarify the details of parents' perceptions by adding their child-rearing attitudes and awareness to the five categories obtained in the current study.

keywords : Parents, Electronic media, Perceptions, Preschoolers